

2023 年度 亀田医療技術専門学校
学校関係者評価 報告書

令和5年7月

学校関係者評価委員会

1. 学校関係者評価の目的

学校法人 鉄蕉館 亀田医療技術専門学校における学校関係者評価の目的を以下のように定める。

- 1) 自己評価の評価結果について、学校外の関係者による評価を行い、自己評価結果の客観性・透明性を高めること。
- 2) 学校において卒業生・関係業界、関係団体、中学校・高等学校等、保護者・地域住民など学校関係者により構成された学校関係者評価委員会が、自己評価の結果に基づいて行う学校関係者評価の実施とその結果の公表・説明により、適切に説明責任を果たすとともに、学校関係者から理解と参画を得て、地域におけるステークホルダーと専修学校との連携協力による特色ある専修学校づくりを進めること。

2. 学校関係者評価委員会名簿

属性	氏名	所属	役職
関係業界	安田 友恵	医療法人 鉄蕉会 亀田総合病院	看護管理部 副看護部長
	泉 綾乃	社会福祉法人 太陽会 健康管理室	主任
高校教員等	山口 健一	千葉県立長狭高等学校	校長
卒業生	佐藤 悦子	医療法人 鉄蕉会 亀田総合病院	看護部主任
	福原 恵美子	医療法人 鉄蕉会 亀田総合病院	看護部主任
在校生保護者	栢尾 光代	社会福祉法人 太陽会 めぐみの里 健康管理室	室長

3. 学校関係者評価委員会の実施状況

- 1) 学校関係者評価委員会実施日時・場所
日時：令和5年5月29日（月） 15時から16時30分
場所：亀田医療技術専門学校 2号館 3階 301
- 2) 学校関係者評価委員会進行状況
 - (1) 開会、配布資料確認
 - (2) 参加者確認
 - (3) 学校長挨拶
 - (4) 学校関係者評価スケジュール確認
 - (5) 学校関係者評価について
 - (6) 自己点検・自己評価の結果について
 - (7) 討議及び意見交換

(8) 今後の予定

4. 2023 年度学校関係者評価委員会議事録

日時：令和 5 年 5 月 29 日（月）15：00～16：30

場所：亀田医療技術専門学校 2 号館 3 階 301

【出席者】

外部委員 5 人

- ・〔高等学校〕 山口健一 千葉県立長狭高等学校 校長
- ・〔関係業界〕 安田友恵 亀田総合病院看護管理部 副部長
泉綾乃 社会福祉法人太陽会 たいよう 健康管理室 主任
- ・〔卒業生〕 佐藤悦子 亀田総合病院 主任
- ・〔在校生保護者〕 栢尾光代 社会福祉法人太陽会 めぐみの里 健康管理室 室長

内部委員

- ・ 学校長 大塚伊佐夫
- ・ 副学校長 鵜田猛
- ・ 助産学科教育主任 吉田広美
- ・ 看護学科教育主任 関根恵子

欠席者

外部委員 〔卒業生〕 福原恵美子 亀田総合病院 主任

内部委員 事務長 松下泰久

司会：鵜田副学校長 書記：片桐

委員会次第

1. 開会、資料確認

鵜田副学校長が司会を務め、資料 1～7 の有無を確認。

2. 参加者の確認 ※資料 1

昨年度で委員の任期が満了となったため、山口、安田、佐藤、福原委員が再任し、泉、栢尾委員が新たに就任した。任期は令和 7 年 3 月 31 日までとなる。

3. 学校長挨拶

「学校評価とは卒業生の現状をみて評価すべきだとも思うが難しいことである。看護師国家試験の合格率は 97% と良好であるが、国試の成績だけで学校評価ができるわけではない。この

会議で忌憚のない意見をいただき、改善に向けて取り組んでいきたいと思うのでよろしくお願
いいたします」と述べた。

4. 学校関係者評価スケジュール確認 ※資料 2

学校評価、自己点検等のスケジュールについて確認。今年度はスケジュール通りに実
施していく予定である。

5. 学校関係者評価について ※資料 3

学校評価の目的、形態と定義に基づいて委員を選出し、本委員会を開催、討議内容を
公開することを確認した。

6. 自己点検・自己評価の結果について ※資料 4.5.6.7

1) 「学校評価 看護師等の養成所の自己点検・自己評価指針 (Vol.2) 2023.1」の項目と 結果 (資料 4) ※過去 4 年間の評価平均点数を提示

2022 年度末 (2023 年 1 月) に行った「学校評価 看護師等養成所の自己点検・自己
評価指針」の評価項目は 9 領域 124 項目あり、5 段階評価で行い、教員 20 人の評価を
平均化し過去 4 年分の評価を掲載。昨年度同様に 4.0 未満の小項目について検討し、次
年度の重点目標、課題とした。

2) 自己点検・自己評価結果に伴う改善方策の取り組みの評価 (資料 5)

2021 年度に評価平均 4.0 未満の小項目 19 について、教育目標の実現に向けて教育活
動の改善を立案し、取り組み、その評価を行った。

III. 教育課程経営

38) 教員が授業準備のための時間をとれる体制を整えている 2021 年度評価 3.5

改善方策・授業日程と業務体制が整えられるように時間割を調整する。

- ・実習指導の在り方を見直し、課業内での学生教育の推進に務める。また、目
に見える、形あるものなど量的学習で判断せず、学生の気づき・思考・表現の
感性を伸ばす学習支援を行う。
- ・教員会議は会議の目的・目標の明確化、事前に資料提示などをし、時間の管理・
短縮、効率化を図る。(Microsoft365、Teams 等の活用)

評価・時間割の計画、調整後の提示が遅くなり、教員・学生共に教育活動に影響を
及ぼしてしまった。

- ・実習記録や事前学習の量的学習の学生指導に偏らないよう調整を図り務めた。しか
し看護実践の成長過程は、実習記録や事前学習の形あるもので実習評価を行って
いるため、また学生の学習力の影響もあるが、量的学習における学生指導への時間
管理不足が生じている。
- ・低学年の課題が見えてきた。知識をつけても言葉、行動で表現する力が不足してい
る。言葉力の未熟な学生に思考を引き出すよう能動的になるような学習指導方法の
改善・強化が必要である。授業の形態も知識を結び付け、考えを伸ばすような内容

を考えていく。

- ・教員会議は事前の資料提示や確認、議題内容の明確化、進行の調整を図り、考慮しながら運営管理に務めた。意識をもって臨むことが大事と考え、今後のさらなる改善に向けて取り組み中である。

40) 教員が相互に成長できるよう、相互研鑽のシステムを整えている 2021年度評価

価 3.8

改善方策・研修会への参加と教育実践能力を養うことを目的に、教員全体または個人に対し研修会の案内や参加を促し、教育力の調整を図っていく。

- ・研修会参加後、会議等で報告を行い教員間で共有・検討し、教育実践に活用していく。

- ・教員間の授業参観や協力支援の推進および風土づくりを実動していく。(教授内容や学生の受講状況の把握など)

評価・千葉県看護学校協議会や日本看護学校協議会主催の WEB での研修会は全教員が参加・受講できるように調整を図った。

- ・教科内・外の教育活動の発表等、参観の提示や声掛けを行い参観できた。また看護技術演習の支援協力は良好であり、授業内容や状況を伝え合うなど風土づくりもできていた。

IV. 教授・学習・評価過程<目標達成の評価とフィードバック>

61) 学生および教育活動を多面的に評価するために、多様な評価の方法を取り入れている 2021年度評価 3.8

改善方策・看護師養成教育の評価の在り方、評価の目的・目標を提示し共有する。

- ・教員の自己教育力、学生の学びの質を測るスケールは「授業評価スケール」「実習評価表」「教科科目の認定試験」とする。またルーブリック評価の観点別評価や成長過程を把握するために優・良・可などの方法も検討する。

- ・学びの成長過程を測る評価表を科目の目標に見合うよう整える。

- ・授業評価・実習評価担当が中心となり看護実践力の成長過程が観える形成評価の在り方や体制を整え構築し、共有を図る。

評価・教科科目の技術試験の評価は、ルーブリック評価に改変したことで、成果や到達すべき状況が分かり易く、かつ課題内容も明確となり改善が図れた。

- ・成長過程が観える形成評価の改編の取り組みはできていない。

62) 教育目標の達成状況を多面的に把握している 2021年度評価 3.9

改善方策・授業、実習、卒業生評価などを検討した上で、達成状況を把握する。

評価・各評価の改変・結果に至った理由の解釈までの取り組みはできておらず、達成できていない。

V. 経営・管理過程

82) 教職員のそれぞれの観点からの財政についての意見は、経営・管理過程に反映できるようになっている 2021年度評価 3.8

改善方策・財政状況等を知る機会（事務長による説明）を設定する。またHP等で公開もさ

れているので閲覧し、興味・関心を持つように促す。

評価 ・学校経営の現況にはあまり意識が向いておらず、事務長にも財政状況の確認や説明依頼を行わなかった。

87) 養成所が設置されている地域環境との関連から学生および教職員にとっての福利厚生の施設設備の整備を検討している 2021年度評価 3.8

改善方策 ・福利厚生の内容が把握できるように提示してもらう。

評価 ・提示依頼をしておらず、福利厚生の内容の把握・提示も不確かである。内容を把握できるものがあると良い。

VII. 卒業・就業・進学

106) 卒業時の到達状況を分析している 2021年度評価 3.9

107) 卒業生の就業・進学状況を分析している 2021年度評価 3.8

108) 卒業生の到達状況、就業・進学状況についての分析結果は、教育理念・教育目標との整合性がある 2021年度評価 3.8

109) 卒業生の就業先での評価を把握し、問題を明確にしている 2021年度評価 3.3

110) 卒業生の就業先との情報交換や調査の実施等ができる体制を整えている 2021年度評価 3.6

111) 卒業生の活動状況を把握し、統計的に整理している 2021年度評価 3.0

112) 卒業生の活動状況の分析結果を教育理念・教育目的、教育目標、授業の展開に活用している 2021年度評価 3.1

改善方策 ・教育目標の達成度を測る卒業修了時に行うアンケートを作成し、教員への周知を図るとともに、実施する。

- ・学生の回答した教育目標の達成度を基に、原因を探索し意味づけしていく。
- ・卒業生の就業先での評価ができるように、組織活動の体制を整える。

評価 ・教育目標の達成度を測る卒業修了時に行うアンケートを作成し、教員への周知を図り、アンケート調査を実施した。

- ・調査アンケートの評価を基に教育目標の達成度、原因探索・状況の解明は行っていない。
- ・卒後教育との連携に向けた体制は整えている。

VIII. 地域社会／国際交流

〈地域社会〉

113) 社会との連携に向けて、地域のニーズを把握している 2021年度評価 3.9

114) 看護教育活動を通して地域社会への貢献を組織的に行っている 2021年度評価 3.8

115) 養成所の教育活動について、地域社会のニーズを把握する手段を持っている 2021年度評価 3.9

改善方策 ・地域社会を知る機会をつくる。

- ・学校行事を通して、地域貢献できるように務める。

評価 ・コロナ禍でもあり、地域社会が学校にどのような社会貢献・支援活動を求めているのか不確かである。

- ・地域の施設を利用して学校祭を開催し、活動模様を SNS で配信した。

IX. 研究

122) 教員の研究活動を保障（時間的、財政的、環境的）している 2021 年度評価 3.7

123) 教員の研究活動を助言・検討する体制を整えている 2021 年度評価 3.7

124) 研究に価値をおき、研究活動を教員相互で支援し合う文化的素地が養成所内にある 2021 年度評価 3.7

改善方策・時間、財政、環境について保証があることを伝達する。

評価・時間の確保や研究など実動するには至っていない。しかし、環境は整えられつつある。今やっていることを、意味づけていくことも必要である。

3) 2023 年度年度 学校評価 看護師等の養成所の自己点検・自己評価指針 Vol.2 改善方策（資料 6）

2023 年度 学校評価 自己点検・評価平均 4.0 未満の細目 6 つの改善方策

取り組みを行った結果、前回は 4.0 未満が 19 項目あったが、今回は 6 項目となった。

III. 教育課程経営

<教員の教育・研究活動の充実>

38) 教員が授業準備のための時間をとれる体制を整えている 2022 評価 3.8

改善方策・授業日程と業務体制が整えられるよう時間割を調整する。全員が目視できるように教科ごとに年間一覧で提示し、調整を図る。

40) 教員が相互に成長できるよう、相互研鑽のシステムを整えている 2022 評価 3.8

改善方策・教育実践能力を養うことを目的に、機会的に教員全体への研修会の案内や参加への声掛けを行う。

- ・学生指導で喚起すべき教科内容は、機会的に情報提示し共有・検討していく。

VII. 卒業・就業・進学

109) 卒業生の就業先での評価を把握し、問題を明確にしている 2022 評価 3.9

111) 卒業生の活動状況を把握し、統計的に整理している 2022 評価 3.7

112) 卒業生の活動状況の分析結果を教育理念・教育目的、教育目標、授業の展開に活用している 2022 評価 3.8

前回の 7 項目から 3 項目に減り、またそれぞれ 109) 3.3→3.9、111) 3.0→3.7、112) 3.1→3.8 とポイントは上がっている。

基礎教育を終えた後、3 年間の看護師養成教育活動がどうであったかを把握し、教育活動の改善に努めていく必要がある。

改善方策・卒業生用（亀田メディカルセンター就職者）、管理者用（亀田メディカルセンター）のアンケートを作成する。

- ・アンケート調査の評価を基に教育目標の達成度・原因探索・要因探索をし、検証する。その結果を基にカリキュラム評価につなげていく。
- ・組織活動の体制（学校・亀田病院）をつくる。（卒後教育に向けた組織的体制を作り上げるのが発展的な課題）

IX. 研究

124) 研究に価値をおき、研究活動を教員相互で支援し合う文化的素地が養成所内にあ
る 2022 評価 3.8

改善方策・教育活動に関わる内容を教材化し、結果をデータ化することに意識を高め、言動
をとっていきよう推進していく。

4) 令和 4 (2022) 年度 自己点検・自己評価結果概要 (資料 7)

取り組み、方法（評価項目、基準、対象者、評価時期）等を確認。

<評価結果>

昨年度と比べ全項目において点数が上昇しているが、中でも VI. 入学、VIII. 地域社会／国際交
流の上昇幅が大きかった。

VI. 入学が 4.2→4.6 へ上昇した要因はアドミッションポリシーを職員間で共有したこと、オー
プンキャンパス（オンラインを含む）の内容を検討し、柔軟に対応した結果だと言える。ただ入
学生確保において受験者が増えたわけではなく、前回 60%だった辞退率が 40%代となったため確
保することに繋がっている。本校が選ばれるようにオープンキャンパスなどを取り組んだ成果だ
と言える。

VIII. 地域社会／国際交流は 4.2→4.5 に上昇。元来、国際的視野を広げるために海外研修を取り
入れているため評価は高めであった。2022 年度は学校行事等 SNS を通じて地域に発信するこ
тоができる。また介護福祉学科は開設当初から留学生を受け入れていたが、看護学科でも現在 2 名
の留学生を受け入れている。

<次年度目標>

1) 受験者の確保を推進する。

- ・オープンキャンパスは HP からの流入が多い。現在 HP をリニューアル中なのでアクセスし
てもらっただけではなく、目的を持った HP づくりをしていく。
- ・来校型とオンラインのメリットを生かし参加者のニーズを捉えながら実施する。

2) グループ・法人全体の資源を活用した研究活動支援の充実と情報提供を行う。また教員の教
育向上に向けた取り組みを行う。

3) 卒業生の活動状況に対する把握及び支援体制の確立を図る。

4) ICT 活用による業務改善に取り組む。

上記次年度目標を達成するために取り組んでいくことを確認した。

7. 討議

上記の内容について確認、検討事項について意見を募る

- ・職員の時間の使い方、確保の仕方でペーパーレスなど様々な活用を行っているようだが具体的
にはどのようにしているのか。 (山口委員)
- ・パソコンやタブレットなど Teams にデータを入れて読み込むなどしている。人によってはデー
タを印刷してる。今までは学生配布の資料を印刷していたが、データで渡すようにし負担は減
ってはいる。しかしはっきりと何が良くなったとは今はまだ明確ではない。
(鵜田副学校長)
- ・各教科、科目の授業日程や回数などは年度始めに決まっているのではないか。

(安田委員)

- ・回数等は決まっているが、時間割の枠にはめていくのが難しい。(鵜田副学校長)
- ・履修進度、時期、回数は年度始めに決まっており、それを開講～終講までを一覧にし、Teamsで共有できるように改善した。(関根看護学科教育主任)
- ・自身が教員をしていた時には年度始めに、日程など時間割がすべて決まっていた。

(安田委員)

- ・今は外部講師の日程を決めてから、専任教員の時間割を組み込んでいる。(鵜田副学校長)
- ・年度始めに決まっていれば、教員も時間の確保・日程が取りやすく研修会などの予定が立てやすいのではないか。(安田委員)
- ・学生に対して心理的サポートが難しくなっているが、専門の方が対応しているのか。

(山口委員)

- ・外部の心理カウンセラーをお願いしている。学生とは面談、メール等のやり取りを行っており、年々増えているように思う。(鵜田副学校長)
- ・助産学科は比較的メンタルフォローが必要な学生は少ない。しかし既往歴がある学生で、実習などで負荷がかかった時に症状が出たことがあり、その際は専門の先生にお願いしたことはある。(吉田助産学科教育主任)

- ・入学する前から心に問題があったり、親子の関係でつまづいたことで心の耐える力が弱かったりと、学生がさまざまな問題を解決せずに入学してきている。学業や暮らしのリズムが整わず、身体が崩れることで心の調和が乱れてくる。メンタルフォローは行っているが、今まで解決してこなかったために、さらに負荷が増す。自分の状況を話すまでに親との壁が厚い。親の前と教員の前での表現の乖離もあり、親と学生の仲介をする度合い、質や量も増しており、親に注ぐフォローも増えてきている。そのため学年の担当教員だけでは解決できないことも多い。(関根看護学科教育主任)

- ・メンタルサポートについてはスクールカウンセラーやソーシャルワーカーをお願いするのがいい。教員だけではできないこと、難しいことも専門家はスムーズに行い、様々なところにつながることもできる。教員によっては話を聞くことなどに得て不得手があり、負担にもなる。専門家に依頼し、入っていただくことで教員の負担が減り、授業等に力を注ぐことができる。(山口委員)

- ・全体的な評価が上がることは素晴らしいことである。ただすべての項目で4.0以上というのは難しい。時間を確保することが難しい現状では勉強も研究もできない。学生をサポートしていく中では大変だと思うが、何とか工夫をして時間を取っていただきたいと思う。

(大塚学校長)

- ・学生の親としては在学中だけでなく、卒業後まで連携を持っていただけると思うと安心できる。(栢尾委員)
- ・卒業時にアンケートを取っていると聞いたが、その結果の共有・公開をしていただけるのか。できれば入職後スタッフに活用できると考える。(佐藤委員)
- ・アンケートは集計して公開する予定である。(関根看護学科教育主任)
- ・施設に3年生が実習にきているが、印象が良いことが多い。先生方の努力、頑張りの賜物だと

実感した。

(泉委員)

- ・受験者の確保が大切である。最近は大学への進学率が上がっており、また家から通える範囲を希望する学生が多い。本校は7割がアパート暮らしをしている。授業料も県の看護学校の中では高い。アドミッションポリシーに準じた学生を一人でも多く入れることを課題としている。

(鵜田副学校長)

- ・自身も長狭高校に赴任した際、定員を確保することがミッションだと考えていた。近隣の中学に長狭高校の良いところを話して回っていた。たくさんの方を話すよりも2つ3つのアピールポイントを話す方が効果的である。また、より生徒に近いポジションの方と話した方が魅力の発信につながる。

(山口委員)

- ・生徒と直に会えるのが良い。担任の勧めで入学を決めたとの話もあるが、高校の教員ともなかなか時間を持つことができない。父兄の勧めが強い力となる。個別の時はなるべく時間を取って対応している。

(鵜田副学校長)

- ・学校見学をいつでも受け入れられる体制があるといい。しかし際限なくやってしまうと教員の負担が大きくなっていく。また様々なところに情報、知識が飛び交っているが、そばにいる大人の意見や話に信ぴょう性がある。

(山口委員)

- ・業務改善のための時間確保、1年間の事業計画、心理的支援、多職種との連携、亀田病院との連携の中で学校教育の評価と今後の改善を考えていく必要がある。

(鵜田副学校長)

- ・助産学科では施設推薦枠を設けることと、国家試験不合格者のフォローを行っていく。

(吉田助産学科教育主任)

- ・入学をさせたからには人として未熟な部分を含め、看護師になることができるように教育をしていかなければいけない。同時に教員も時代に合ったやり方で力をつけ、さらに学生を養成していく力をつけていくことが必要である。終わりはないが教育活動を推進していく。

(関根看護学科教育主任)

総括

- ・学校では今できることをやっている。なかなか思うような学生が入学することは難しい。多様な学生を工夫し、良い助産師、看護師になるように教育活動をしていってほしい。しかし教員の負担が大きくなっていく。調整をつけてうまくやると良い。学校だけでは難しいことも多くあり、取り組みも続けていかなければいけない。今後とも協力をお願いしたい。

(大塚学校長)

8. 今後の予定

- ・議事録を作成し、重点目標を立て、報告書を作成し、委員に送付する。審議し、承認をいただいたら後、学校で報告を行い、公開する予定。
- ・次回開催時期
令和6年5月27日(月)を予定。

以上

5. 自己評価結果概要

1) 自己点検・自己評価の実施

本校では、自己点検・自己評価の取り組みとして、「看護師等養成所の教育活動等に関する自己評価指針作成検討会」報告書を基に点検・評価項目を見直し、9領域の 카테고리及び124項目の小項目を設定した。そして、作成した評価表を基に自己点検・自己評価を実施した。

(1) 方法

作成した自己点検・自己評価表に基づき本校教員が自己評価を行う。その集計結果を踏まえ次年度の目標を導き出す。

(2) 評価項目

・9領域 124項目

I. 教育理念・教育目的、 II. 教育目標、 III. 教育課程経営、 IV. 教授・学習・評価過程、 V. 経営・管理過程、 VI. 入学、 VII. 卒業・就業・進学、 VIII. 地域社会／国際交流、 IX. 研究

(3) 評価基準

・5段階評価（1：当てはまらない 2：やや当てはまらない 3：どちらとも言えない
4：やや当てはまる 5：当てはまる）

(4) 対象者

・教員 20名（看護学科、助産学科、介護福祉学科）

(5) 評価時期

・令和5年2月

以上を記載し、学校評価委員会に提出をした。

2) 自己点検・自己評価結果の報告

学校関係者評価委員会では、『2022年度自己点検・自己評価結果』を用いて、亀田医療技術専門学校の担当者より学校関係者評価委員に対して、各項目の自己点検実施状況及び自己評価ポイント、評価の課題、今後の改善方法等について説明をした。当日は重点目標を中心に検討をお願いした。

6. 重点目標について

1) 受験者数の確保を推進する。

<計画>

- ①学科の特徴を踏まえ、入学選抜時期や方法について検討する。
- ②高等学校ガイダンスには、担当者による分担を行い多くのガイダンスに参加する。
- ③リニューアルしたホームページのアクセス件数など KPI を設定して取り組む。
- ④学校内での学生募集検討会議を開催し、広報活動について検討・情報共有を図る。
- ⑤オープンキャンパスでは、オンライン・来校型のメリットを生かし、参加者のニーズを捉えながら実施する。

⑥教職員への入学状況や推移に対する情報提供を実施する。

- ・受験者の確保が大切である。最近は大学への進学率が上がっており、また家から通える範囲を希望する学生が多い。本校は7割がアパート暮らしをしている。授業料も県の看護学校の中では高い。アドミッションポリシーに準じた学生を一人でも多く入れることを課題としている。
(鵜田副学校長)
- ・自身も長狭高校に赴任した際、定員を確保することがミッションだと考えていた。近隣の中学に長狭高校の良いところを話して回っていた。たくさんのお話を話すよりも2つ3つのアピールポイントを話す方が効果的である。また、より生徒に近いポジションの方と話した方が魅力の発信につながる。
(山口委員)
- ・生徒と直に会えるのが良い。担任の勧めで入学を決めたとの話もあるが、高校の教員ともなかなか時間を持つことができない。父兄の勧めが強い力となる。個別の時はなるべく時間を取って対応している。
(鵜田副学校長)
- ・学校見学をいつでも受け入れられる体制があるといい。しかし際限なくやってしまうと教員の負担が大きくなってくる。また様々なところに情報、知識が飛び交っているが、そばにいる大人の意見や話に信憑性がある。
(山口委員)

評価結果	①適切：5名（100%）	②不適切：0名（0%）
<コメント> <ul style="list-style-type: none">・受験生が多く情報を手に入れられる時代なので、「どのようにして誰に何を伝えるか」がポイントになってくると思います。高校の先生方には何を、受験生には、保護者にはと魅力発信の工夫が大切だと思います。・ご意見にあるように、アドミッションポリシーに準じた学生を確保するとなると、学生単体というより、担任や組織、家族を巻き込んだ説明会や見学会の計画・実施が望ましいと考えます。・計画通り進めてください。・総体的な受験生数が減少している中、受験者の確保の為高校に出向いたりHPの工夫、またオープンキャンパスでの対応など多方面からのアプローチをされているのがいいと思います。在校生の意見や様子を参考にされる方が多いと思いますので在校生が生き生きと楽しそうに学校に通っている姿が見られると安心して受験してもらえないかと思いました。		

2) グループ・法人全体の資源を活用した研究活動支援の充実と情報提供を行う。

また、教員の教育力向上に向けた取り組みを行う。

<計画>

① 亀田グループで開催される研修へ参加する。

② 研修会参加の報告会を実施する。

③ 教員間での授業参観公開を実施する。

・ 全体的な評価が上がることは素晴らしいことである。ただすべての項目で 4.0 以上というのは難しい。時間を確保することが難しい現状では勉強も研究もできない。学生をサポートしていく中では大変だと思うが、何とか工夫をして時間を取っていただきたいと思う。

(大塚学校長)

・ 学生のサポートとして心理的サポートが難しくなっているが、専門の方が対応しているのか。

(山口委員)

・ 外部の心理カウンセラーをお願いしている。学生とは面談、メール等のやり取りを行っており、年々増えているように思う。

(鵜田副学校長)

・ 助産学科は比較的メンタルフォローが必要な学生は少ない。しかし既往歴がある学生で、実習などで負荷がかかった時に症状が出たことがあり、その際は専門の先生にお願いしたことはある。

(吉田助産学科教育主任)

・ 入学する前から心に問題があったり、親子の関係でつまづいたことで心の耐える力が弱かったりと、学生がさまざまな問題を解決せずに入学してきている。学業や暮らしのリズムが整わず、身体の健康が崩れることで心の調和が乱れてくる。メンタルフォローは行っているが、今まで解決してこなかったために、さらに負荷が増す。自分の状況を話すまでに親との壁が厚い。親の前と教員の前での表現の乖離もあり、親と学生の仲介をする度合い、質や量も増しており、親に注ぐフォローも増えてきている。そのため学年の担当教員だけでは解決できないことも多い。

(関根看護学科教育主任)

・ メンタルサポートについてはスクールカウンセラーやソーシャルワーカーをお願いするのがいい。教員だけではできないこと、難しいことも専門家はスムーズに行い、様々なところにつなげることもできる。教員によっては話を聞くことなどに得て不得手があり、負担にもなる。専門家に依頼し、入っていただくことで教員の負担が減り、授業等に力を注ぐことができる。

(山口委員)

評価結果	①適切：5名（100%）	②不適切：0名（0%）
<p><コメント></p> <ul style="list-style-type: none">・ 多くの業務の中、研修時間を確保するのは非常に難しいことだと思いますが、資質向上を怠ることは組織の後退につながってしまうので、計画的に組み入れていくことが重要だと思います。・ 討議の中で、学生のメンタルケアが話題となりましたが、教員が抱え込むことのないように、専門のスタッフ、または外部人材等による支援体制が必要な時代だと思います。		

- ・メンタルサポートの必要とする学生には、早急に専門のカウンセラーをお願いするのが良いと思います。担任として、フォローしていくことは変わりません。しかし、他の学生もおり、また、自分自身の成長を考えると、専門家に任せられるところは任せ、時間を確保し、他の学生の教育や、教育を通して何か研究に繋がる支援を受けられる研修に参加できることが望ましいと考えます。
- ・教員の負担軽減も考えながら進めていけるとよいと思うので、参加者の意見を取り入れていけるとよいと思います。
- ・メンタルサポートについては現場でも課題となっています。学生の時に適切な対応をしていただくことで学生自身も自分のメンタルの状態とうまく付き合えるようになると思います。

3) 卒業生の活動状況に対する把握及び支援体制の確立を図る。

<計画>

- ①卒業時の到達目標調査の活用について確立していく。
- ②卒業生の就業先との連携を図り、就業状況や問題について把握する。

- ・学生の親としては在学中だけでなく、卒後教育まで連携を持っていただけると思うと安心できる。 (栢尾委員)
- ・卒業時にアンケートを取っていると聞いたが、その結果の共有・公開をしていただけるのか。できれば入職後スタッフに活用できると考える。 (佐藤委員)
- ・アンケートは集計して公開する予定である。 (関根看護学科教育主任)
- ・施設に3年生が実習にきているが、印象が良いことが多い。先生方の努力、頑張りの賜物だと実感した。 (泉委員)

評価結果	①適切：5名（100%）	②不適切：0名（0%）
<p><コメント></p> <ul style="list-style-type: none"> ・3年離職率等が良く話題となりますが、終身雇用の考え方が薄れている今、一律に考えるのは難しいと思います。しかし、離職理由が学生時代の指導や支援で何とかなったものであれば、情報共有できると今後に活かせると思います。 ・教育目標の達成度を測る卒業終了時に行うアンケートを共有することによって、卒業後就業先がアンケート結果をどのように活用できるか？在学中のメンタル面や、実習中の様子など少し細かい所が知りたい。それらの情報から、就業後、スタッフが注意することや、興味があることなどが把握でき、キャリア支援等にも役立つのではないかと。 ・看護師の仕事は看護学校の卒業がやっとスタートラインだと思います。現場としては学校と連携をして一緒に育てていく体制が取れたら理想的だと思いました。 		

4) ICT 活用を推進することにより、学生の学習効果を高めると共に教職員の業務改善を図る。

<計画>

- ①電子教科書・タブレット活用について評価・修正を行い改善を図る。
- ②ICT を活用することにより、会議時間の短縮など効率化を図る。

- ・ 職員の時間の使い方、確保の仕方でペーパーレスなど様々な活用を行っているようだが具体的にはどのようにしているのか。 (山口委員)
- ・ パソコンやタブレットなど Teams にデータを入れて読み込むなどしている。人によってはデータを印刷してる。今までは学生配布の資料を印刷していたが、データで渡すようにし負担は減ってはいる。しかしはっきりと何が良くなったとは今はまだ明確ではない。 (鵜田副学校長)
- ・ 各教科、科目の授業日程や回数などは年度始めに決まっているのではないか。 (安田委員)
- ・ 回数等は決まっているが、時間割の枠にはめていくのが難しい。 (鵜田副学校長)
- ・ 履修進度、時期、回数は年度始めに決まっており、それを開講～終講までを一覧にし、Teams で共有できるように改善した。 (関根看護学科教育主任)
- ・ 自身が教員をしていた時には年度始めに、日程など時間割がすべて決まっていた。 (安田委員)
- ・ 今は外部講師の日程を決めてから、専任教員の時間割を組み込んでいる。(鵜田副学校長)
- ・ 年度始めに決まっていれば、教員も時間の確保・日程が取りやすく研修会などの予定が立てやすいのではないか。 (安田委員)

評価結果	①適切：5名（100%）	②不適切：0名（0%）
<p><コメント></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 何について活用を進めると効率が上がるのかを検証する必要があると思います。紙の方が効率が良いものもあると思いますが、それを言っているとずっとそのままだろうし、混在することによって余計な手間が増えていることも意外に多いと思います。 ・ 引き続き、効果的な時間短縮できる業務改善を行う。あらかじめ、授業日程は決まっていると教員も学生も計画が立てやすく、行動しやすいから時間短縮に繋がりますね。 ・ ICT は増々活用が進んで行くので、教育側も対応していけるよう取り組んでいけるとよいと思います。 ・ ICT の活用により業務を効率化させることで先生方の負担を減少させ、学生さんの教育に余裕を持って関わっていただけたらいいと思いました。 		